

## 留学課題レポート

佐賀大学農学研究科修士課程 2 年 21754001 金澤 優菜

### テーマ「持続可能な農業」

#### 派遣先大学での活動内容

派遣先であったハサヌディン大学では 2 名の指導教員の方に指導していただきながら、「都市部における生活圏を利用した CBT とその効果～インドネシア,マカッサル市 Lorong Wisata を事例として～」をテーマとして修論調査の計画からデータ収集までを行なった。ハサヌディン大学の存在するマカッサル市では現在、“Lorong Wisata”という地域開発プログラムを遂行している。今回の研究ではそのプログラムの社会経済的効果を Community-based Tourism という概念から明らかにした。この Lorong Wisata プログラムでは、マカッサル市内にある数多くの住宅路地を地域住民が自ら装飾したり、園芸活動を行うなど様々な活動を通して、路地地域を人が訪れやすい、つまり観光地のような場所にするを目的としている。マカッサル市はスラウェシ島内の最大都市として位置付けられており、市としても世界基準の都市を目指している。そのため、現在マカッサル市内ではモールや高級住宅地というような都市アイコンの開発が急激に進められているのだが、一方でその急速な都市開発によってスラム街の拡大や貧困層の増加などが問題となっている。そしてこのスラムが主に広がっているのが大通りの脇に沿って広がっている路地地域だ。調査では、4つの路地地域を調査地として選出し、各路地地域の現地観察、代表者へのインタビュー調査、路地住民へのアンケート調査、マカッサル市の観光部門長へのインタビュー調査を行った。調査の中では、何度も調査地へ出向き、コミュニティの方々と食事と共に行ったりとコミュニケーションをよく取るなどし、対面式でインタビューやアンケート調査を行った。このプロジェクトは開始されまもなく、関連する先行研究や市が公開している資料などもかなり限られていた。そのため、この研究ではこれらのデータ収集を通して、プログラムの概要とその具体的な事例を明らかにした。それに加えて、アンケート調査では、このプログラムを通して、治安や景観の向上、経済状況の向上などの社会経済的効果を地域住民が実感していることが明らかになった。マカッサル市側はプログラムの遂行期間を 5 年間と設定しているため、残りの 2～3 年で路地地域住民のモチベーションの維持、拡大やこれまでのプロジェクトの社会経済的効果がこのプロジェクトの持続性を左右すると思われる。しかし市としての評価基準などがないことや、更なる規模拡大を目標としていることから、現在プロジェクトを遂行している路地地域への持続的支援や評価が課題としてあげられるだろう。

#### 学んだこととテーマの関係とその応用

この Lorong Wisata プログラムの中で主な経済的効果をもたらしていたのは、Lorong Garden という活動であった。Lorong Garden は日本語に訳すと“路地農業”を意味する。調

査を行った路地コミュニティ内には KWT という女性農業グループがそれぞれの路地地域に存在し、地域住民の女性たちが住宅路地内の以前空き家だったスペースやゴミが放置されていたスペースを活用して農業活動を行うフィールドを作ったり、路地の脇に沿って花壇を置き、農作物を栽培している。調査した地域では、市の農業部門の監督のもと、地元のレストランやマーケットと契約を結び路地で栽培した作物を出荷している。主な作物として比較的栽培が簡単で需要のあるトウガラシやサラダ菜などがみられた。また水産部門からは、水槽や稚魚の支援を受け、ナマズなども養殖し、同じようにレストランなどに出荷している。さらにそれだけでなく栽培した作物を野菜チップスやジュースに加工し、加工品の販売も行っている。外部に向けた販売だけでなく、地域コミュニティが日常的に炊き出しを行いその際にコミュニティで栽培した作物を利用していたり、市場にいかずコミュニティ間で作物の販売を行うというように、コミュニティ内部でも消費されていた。このように地域住民（KWT）へこの活動が売り上げや作物の消費という形につながり、最終的に微々たるものであるが収益の向上や生活コストの低下という経済的効果をもたらしていた。現地学生に日本の農家ビジネスの事例について発表した際には、インドネシアでは未だに、農業は農村地域で行われるものであり、低賃金を代表する職業というイメージが強いことを知った。また日本の農家の様に独自の販売経路を持っていたり、ビジネスとして農業を展開できるような環境が整っていない。そのような背景を持つ一方でこの Lorong Wisata プログラムでは、農業活動が都市地域で行われており、さらにその中で、農業は地域開発の一環、景観保護、治安向上、エンパワーメント、女性の社会参加向上、生活コスト削減に伴う貧困解決といった文脈として様々な機能を持ちながら利用されている。日本でも、農業従事者の高齢化や後継者の不足、それに伴う耕作放棄地の拡大や食料自給率の低さなどが常に問題視されており、そのような背景の中で持続性を求めるためにスマート農業の活用や品種開発など様々な分野で研究が進められている。しかし、この調査を通して、Lorong Wisata プログラムで地域住民が受けているような農業活動の副次的効果に焦点を当てることも農業の持続可能性を考える上で重要な側面なのではないかと思った。私自身、この調査を行う前にも持続可能な農業について考える機会が多かったが、農業は食料を生産しそれ以上でも以下でもない固定された視野の中で捉えていたように思う。しかしマカッサル市では、このように農業という活動が、地域住民の生活や意識を変え、農業で地域の持続性を高めていた。この様に地域開発の一手段やある団体の活動の一環として、農業活動をより身近な存在として、取り組む環境づくりを行うことで、地域のフードセキュリティの発展や地域住民の農業に対する知識・経験・興味にさらに繋がっていくのではないだろうか。そしてそのためにも農業と地域住民の関係性を取り持つ人材の育成や支援環境が必要となるだろう。